川端康成

舞姫の暦

川端康成

毎日新聞社

舞姫の暦（まいひめ　こよみ）　定価一三〇〇円
昭和五十四年五月十日　印刷
昭和五十四年五月二十日　発行

著　者　川端康成（かわばた　やすなり）
編集人　吉田掟二
発行人　高原富保
発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ッ橋
〒530　大阪市北区堂島
〒802　北九州市小倉北区紺屋町
〒450　名古屋市中村区名駅

印　刷　中央精版
製　本　大口製本

© HIDEKO KAWABATA Printed in Japan 1979　0093—400204—7904

舞姫の暦＊目次

舞姫の暦 9
いざ都へと 9
質屋と歌舞伎座 30
一つの寝台 60
鍵を持てる男 74
弓子と竹友 87
山の約束 98
人形の衣裳 112
男心二つ 123
寝顔 137

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

紅い爪　148
傷つける夜　154
天才の帰朝　170
運命の前兆　180
再会　195
その後　206
母の読める　213
解説　佐伯彰一　246
覚書　川端香男里　252

裝釘山高登

舞姫の暦

舞姫の暦

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

いざ都へと

南の国へ去る夏鳥や旅鳥、北の国から来る冬鳥、麓へ下りる漂(さすら)い鳥――そういう渡り鳥の秋の賑わいが寂れはじめた山では、もう鹿も猪も今年の愛を果して、牝は身籠っている頃であった。

そして狐の恋の季節が近づいていた。

秋蚕(あきこ)もあがっていた。

峠の彼方の山深くには、冬眠の寝屋支度にとりかかった熊もいるかもしれない。

「野いばらの実はね、熊の胃腸の妙薬なんだとさ。」

「まあ。こんな可愛い実を、あの熊が食べるの？」

と、弓子は可笑(おか)しそうに野いばらをかざすと、小さな実の赤く熟した色が見えるほど冴えた

月明りであった。
「ね、いいこと？　野いばらの実が熊の胃腸の妙薬で、熊の胆が人間の胃腸の妙薬なら、人間も野いばらの実を食べたらいいんじゃない？　野いばらの実もやっぱり、熊の胆みたいに苦いかしら。」
「怪我するよ、唇。棘がある。」
「いいの。痛い目にあったら、きっといつまでも思い出すわ。祭の夜の棘で傷したことがあったって……。」
（それは、国男さんと二人で、踊の群を抜け出した時のことだったって。）という弓子の心の言葉を、国男は聞いたように思った。
いばらの棘なんかで、野の赤い実よりきれいな唇に、傷させてよいものか。弓子の唇が破れるほど強く、国男は接吻したいのだった。
「ほんとうに不思議なの、お母さんに可愛がられたことだって、私忘れやしないけれど、叱られて泣いたことの方が、ずっとよく覚えているのよ。熊の胆って苦いわねえ。お母さんが無理に飲ませたの、思い出すと、今でも苦くなるわ。もっともっと叱られておきたかったわ、あんなに早く別れるのなら。」
「そういう言い方はよくないよ。」
「だって、ほんとうなんですもの。」

「そりゃね、愛情ってものは、そうかもしれないさ。だけど、弓子さんて人の一生がこの先、なんだか不しあわせなもののように、聞えるじゃないか。それにだ、十六七の女の子がそんなこと言うといかにも悲しみを早く知り過ぎたようで……。」

「あら。今は私なんにも悲しかないわ。悲しもうと思ったって、悲しかないわ。」

国男は（よく分った。）という風にうなずきながら、

「寒かないかい。」

と、弓子の肩を抱くと、彼女は素直に国男の胸へもたれて、子供のようになにげなく、

「ねえ、忘れるってどういうことなの？」

「ええ？」

「踊を習いに東京へ出たら、弓子は国男さんを忘れてしまうって、国男さん言ったじゃないの？」

「それはね……。」

「私には分らないわ。弓子が国男さんを忘れるって、どういうことだか、幾ら考えても分らないわ。」

と、弓子は国男の袂（たもと）を握ると、それで自分の胸を抱いて、

「私小さい時ね、お母さんの首を抱いたり、お乳を握ったりして、眠ったのよ。でも、朝目を覚ましてみると、いつも手が放れているの。なんだか悲しかったわ。寝る前にいくら手に力を

入れておいても、やっぱり駄目なの。——忘れるって、そういうことかしら？」
鎮守の森の踊太鼓が、ふと間近く聞えた。風のせいか。落ち残った枯葉が、二人の膝に散って来た。
「それでね、こんな風に……。」
と、弓子は国男の袂に手を入れて、それをぐるぐる腕に巻きつけながら、
「お母さんのお寝間着の袖を、しっかりつかまえて、寝てみたの。お母さんの体だとすべっこくて、手が放れるけれど、着物を巻きつけとけば、大丈夫だと思ったのよ。でも、やっぱり駄目だったわ。」
「可哀想なことを考える赤ん坊だね。」
「お母さんも、そう言ったわ。——おませなことを考えるものじゃありません。弓子が手を放したって、お母さんがちゃんと夜通し弓子を抱いていてあげるから、安心してお休みって。」
「僕だってそうだよ。弓子さんが僕を忘れることがあったって、僕は弓子さんを忘れるもんか。だから、弓子さんは安心して、ただ一筋に踊の勉強をするんだよ。二人とも希望の門出の前だ。悲しい話は止そうよ。」
「今はなんにも悲しかないって、私言ったじゃないの？　うれしいから、悲しいことを思い出すんじゃないの？　悲しい時は、悲しい話なんか出来やしないわ。」
「うれしい顔して、悲しい話をする、いやだよ、そんなの。」

「私だっていやよ。だけど、眠っている間も、あんなにお母さんを放したくなかったの、早く別れる、虫の知らせだったのよ。お父さんが一緒にいらっしゃらなかったから、よけいお母さんにまつわりついたのかしら。なんだかお母さんも、どこかへ消えてしまいそうな気がして……。」

「熊の話でもしようよ。熊はね、冬眠の前に、いろんな木の実だとか、栗鼠(りす)だとか、赤蟻(あかあり)だとかを、腹いっぱいつめこんで——春の彼岸まで、飲まず食わずだからね。——その食べじまいに、消化剤の野いばらの実を飲むんだよ。」

国男が先に東京へ出るなら、二人はしばらく離れていねばならない。

晩秋に腹を満たして、熊が冬眠りの間の脂肪を蓄えるように、二人も別れている間の愛を、今蓄えておこうと、国男の腕には力が加って、

「また、冷たい風。」

「いいえ、ちっとも。——抱かれているって、温かいものね。こんなに温かいの、知らなかったわ。」

と、まるで母に抱かれたかのような、弓子の安らかな声は、国男の胸に沁み通って、母ごころに似た温かさが、彼のうちにこみ上げて来た。

(悲しみは大人ほど知っても、恋にはほんの子供なんだ。)

と、国男は思って、ふと目を落すと、そこには、なんの飾りもない、さらさら伸びるにまか

せた、弓子のお河童が、月明りにも黒く光って、悲しいほど清らかだった。
国男はその素直な黒髪をじっと頤の尖で抑えて、
「弓子さんは、なぜ東京へなんか行くんだい。」
「国男さんが行くから、行くのよ。」
「じょうだんじゃないよ。僕こそ弓子さんが行きたがるから、行くんだよ。」
「じょうだんじゃないわ。」
「僕のは、真面目な話なんだよ。」
「ええ。私だって。」
「若い娘がうっかり東京へ出て、どうなるか。」
「国男さんのしてくれるようになるわ。国男さんのいいように、どんなにでもなるわ。」
国男に縋ってさえいれば、東京にも、地獄にも、なんにもこわいものはないと、弓子は信じて疑おうとしない。しかし国男は、
(国男さんのしてくれるように、国男さんのいいように、どんなにでもなる。)
と、いじらしく頼り切った言葉を聞くにつけても、喜びの底に不安の影が差すのを、どうすることも出来なかった。
国男は二三日前に読んだ、小説の人物を思い出した。——大学出の秀才が、妻の働いている酒場へ、雨の夜、妻の雨傘と下駄を持って迎えに行く。それが、広い東京で彼に与えられた、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.